

親鸞における三部經千部読誦中止の意義

毛利勝典

一 問題の所在

一九二一（大正一〇）年、西本願寺の蔵から発見された『惠信尼消息』は、親鸞の行実を具体的に語るものとして様々な影響を真宗学や歴史学の分野に与えたが、五通目の惠信尼の述懐による親鸞の寛喜三年の体験（あるいは健保二年の体験）の告白もその例外ではなかった。『惠信尼消息』の発見以降、多くの研究者がこの文を取り上げ様々な学説を展開しているが、これらの学説の特徴を一瞥すると、（一）三願転入の時期、（二）自力他力の解釈、（三）衆生利益（社会的実践）、の三つの問題に分けて考えることができる。

特に衆生利益（社会的実践）の問題に関しては、この文を根拠に、それを消極的に捉える立場と逆に積極的に捉える立場の二つに大きく意見が分れている。例えば、社会学者大村英昭氏は、

そうせざるを得ない面がわれわれにはある。

（『ポスト・モダンの親鸞』）

と述べられ、衆生利益（社会的実践）を人間の同情心の上に成立した「すえとおる」ことのない無明の行であると捉えられている。これに対して、真宗学者信楽峻磨氏は、

親鸞における衆生利益とは、基本的には、ひとえに衆生を教化して本願に帰入せしめることであって、念仏を勧化することにはかならなかったことは明らかであるが、またそのことは、広くは現実生活への振がりとしての、現世の利益ということをも含むものであったことが思われるのである。（『親鸞における信の研究』）

と述べられ、伝道活動が同時に衆生利益（社会的実践）に繋がることを強調されている。更に川本義昭氏は、

親鸞は読誦行を中止し放棄するが、それは断じて衆生利益というモチーフの放棄ではなかった。逆にモチーフの完全を期するゆえに読誦行は放棄されざるをえなかったのであって、「体験」の顛末に衆生利益という普遍的Ⅱ民衆的課題は一貫している。

「人の執心、自力の心」に違ひはないが「煩惱の興盛」において、

〔親鸞の「実践性」をめぐる方法的覚え書き―「寛喜」の体験を逆射するもの―〕

と述べられているが、親鸞にとって読誦行の放棄は衆生利益の放棄ではなく、更なる課題の深化を意味していると捉えられている点に、注目せざるを得ないのである。

二 親鸞が抱えていた当時の情況

親鸞が抱えていたその当時の情況は、おおよそ三つの視点から捉えることが出来る。

一つは、人々が置かれていた自然環境的情況である。『恵信尼消息』においても、

今年の飢渴にや、飢死もせんずらんとこそ覚え候へ。……又この国は、去歳の作物、ことに損じ候て、あさましき事にて／一年の大温病におほく失せ候ぬ。

と記されているが如く、当時飢饉・疫病が流行しており、宮崎円遵氏も、健保の頃、東国では飢饉があつて民衆は苦しめられた、と述べられている。

しかし、親鸞は信仰の上から、このような自然環境的情況に對しては、

なによりも、こそ・ことし、老若男女おほくの人々の死あひて候らんことこそ、あはれに候へ。たゞし生死無常のことほり、くはしく如来のときをはしまして候うへは、おどろきおほしめすべか

らず候。

〔末燈鈔〕

と晩年門弟達に對して述べ、「如来のときをはしまして候」「生死無常のことほり」として、これらの情況を受容すべきことを説いている。

二つには、政治的・社会的情況である。その当時は周知のごとく貴族中心社会から武家中心の社会への移行期であり、特に農民は、笠原一男氏が指摘されているように、莊園体制崩壊の中で貴族・寺社と勃興する武士勢力との二重支配を受け、苛酷な収奪を受けていた。このような政治的・社会的情況に對しては、やはり晩年の善鸞義絶にも関わる鎌倉幕府への念仏停止の訴訟事件に際して、親鸞は次の様に述べている。

余のひとびとを縁として、念仏をひろめんと、はからひあわせたまふこと、ゆめゆめあるべからずさふらふ。……そのところの縁つきておはしましさふらはと、いづれのところにてもうつられたまひさふらふておはしますやうに御はからひさふらふべし。

〔御消息集〕

ここで、親鸞は仏縁が尽きたならばその土地を離れ逃散せよと語っているが、鎌倉時代において逃散とはどのような意味を持っていたのであろうか。入間田宣夫氏は、中世農民は訴訟と逃散の権利を有しており、一定の条件を満たしていれば「去留」の自由があったとして、

百姓申状を提出して理非の決断をもとめ要求が容れられなければ

逃散する、つまり訴訟と逃散とは中世農民の基本的な権利であった。それは年貢皆済などの条件を満たし作法にかなってさえいれば原則として誰からも侵害されることがない神聖な権利であった。……いつでも年貢さえ納めれば不都合な領主のもとを立ち去る（逃散）ことができるという「去留」の自由は、不都合な領主を捨てて、よい領主のもとに赴くことができるということでもある。

（『百姓申状と起請文の世界』）

と述べられている。この様な社会状況の中で、親鸞が仏法を俗縁に優先させ逃散を認めていたということは、少なくとも念仏停止という権力者による宗教弾圧を、親鸞は自然的情况である「生死無常のことほり」とは捉えず、何らかの積極的な社会的働きかけ、あるいは抵抗をもって対応すべきであると考えていたことが、この『消息』の文面から窺えるのである。

三つ目は、親鸞の個人的状況、個人的な体験の問題である。これは言うまでもなく三部経千部読誦の場合であれば、親鸞が越後より常陸に移住する際に読誦を試みたという親鸞自身の個人的動機の問題であって、この移住の理由や三部経千部読誦中止の理由が奈辺にあったのかという親鸞の意識、主体性の問題である。

この様に親鸞がその当時抱えていた状況としては、自然環境的情况、政治的・社会的情况、個人的状況の三つの視点に分けて考えることが出来るであろう。

三 三部経千部読誦の意味

それでは、三部経千部読誦にはどのような意味があったのであろうか。

覚如の『口伝鈔』では、親鸞の寛喜三年の体験を「助業をなをかたわらにします事」と語っているように、三部経千部読誦を浄土教の伝統的教義理解に従って五正行中の助業と捉えており、それは言い換えるならば執心自力の定散心であると言うことが出来る。それでは、それに具体的現実的にはどのような意味を持っていたのであろうか。森龍吉氏は水害の被害民の供養と救済のためと推測されているが、あるいは先程の宮崎円遵氏の飢饉の被害者の救済のための読誦行となれば、何れにしろそこには自ずと祈禱・呪術の意味が備わってはこないであろうか。現に平雅行氏は、

都市貴族を中心に視えない世界への不安感が増幅され、様々なタブーや死霊・死穢・物怪・来世の観念を異様なほど肥大化させていったのではなからうか。そしてその一貫として浄土教の発達があるのだらう。……そしてこれ以後、都市による農村支配が新たに展開してゆく中で、浄土教もまた農村の中へ、地域社会の中へと浸透してゆき、地域民衆の死生観を大きくゆさぶっていったのである。（『中世日本の国家と仏教』）

と述べられ、自然環境的情况や政治的・社会的情况の中で、

浄土教は呪術的観念を取り込むと共に、逆にその様な観念の流布を行ったことを指摘されているが、その様な歴史状況の中で、親鸞の三部経千部説誦が試みられたという点に注意しなくてはならない。

四 説誦中止に到る精神的過程

親鸞は三部経千部説誦を途中で中止したが、そこにはどのような精神的過程があったのであろうか。このことについて『恵信尼消息』では、

これはなにことぞ、「自信教人信難中転更難」（礼讃）とて、自ら信じ、人を教へて信ぜしむる事、まことの仏恩を報る奉るものと信じながら

と述べられているが、今ここでは、この「自信教人信」について心理学的に二つの視点から捉えてみたい。

一つには、アメリカの心理学者エリクソンの唱えたアイデンティティ（主体性／自己同一性）の考え方からである。この考え方によると、人間は自分が個人として同一性と連続性を持つているという主体的側面と、自分が属する社会集団の中で、自分の存在や働き、役割などが一貫して認められて、意味付けられているという客観的側面の、両者の調和においてアイデンティティ（主体性）は形成されるとされている。この考え方からすれば、親鸞における「自信教人信」も単なる

自信↓教人信という構造ではなく、自信↑教人信という円環構造によって親鸞の主体性は確立されたのであり、しかも親鸞の自信の確立のためには伝道活動による他者との関係が不可欠であったと言いうことが出来るのである。

またもう一つの視点として、具体的な親鸞の信仰的内実を岸本宗教学によって尋ねるならば、人格内部からの宗教意識の規定として親鸞の信心は捉えることができ、また、人格内部に形成された問題解決のための恒常的態度としての信仰体制は、「往生をねがふしるし」「世をいとふしるし」と言われる、念仏者集団の問題解決のための一つの似通った傾向性である「しるし」に、それを求めることが出来る。それに対して、具体的に信仰体制に基づいて打ち出されてくる宗教的行為は、親鸞の場合、不の社会的実践とも言うべき「国王不礼」「神祇不拝」であると言いうことができよう。何故なら、親鸞の宗教意識（信心）としての唯信（専修念仏）は持戒や積善としての宗教的行為を否定しており、逆に持戒や積善を肯定する政治的・社会的情况に対しては、「この世のならひにて念仏をさまたげん」と、それらを相対化する視点を親鸞は信心（宗教意識）としるし（信仰体制）の上から確立しているからである。平雅行氏は中世の政治と宗教の関係について、

中世仏教の基軸は浄土教よりもむしろ、五穀豊穡・天長地久を祈る国家祈禱にあると言われているが、こうした国家祈禱のイデオ

親鸞における三部経千部読誦中止の意義（毛利）

ロギーの有効性を根底で支えているのは、技術と呪術の未分離の問題であろう。……国家の目的を仏法興隆に求め、それを通じて民衆の安寧を確保するといった思潮も登場しており、それが寺社勢力のイデオロギーであるに留まらず、為政者の国政観をも捉えるに至っている。

〔同〕

と述べられているが、親鸞の三部経千部読誦発願の要因の中にもこの様な中世の政治的・宗教的背景があったと考えられる。しかし、親鸞はその様な政治的・宗教的背景が真宗教義に違うことは勿論のこと、そこに祈禱・積善を通して生まれてくる宗教意識が他者との関わり（「自信教人信」）を疎外する非宗教的なものであり、しかも呪術に埋没することは人間の自立と主体性、人間の尊厳性を疎外し、国家あるいは寺社勢力による政治支配・宗教支配を肯定するということを、これまでの法然門下での学びと念仏弾圧という体験の中から、直観的に学び取っていたのである。これが親鸞が三部経千部読誦を中止した理由である。

五 まとめ

親鸞が行おうとしていた三部経千部読誦には、呪術・祈禱の意味と自力の積善的行為としての二つの意味合いがあった。しかし、親鸞はこの行為を途中で中止し、仏恩報謝としての伝道活動以外に自らのなすべき行為はないと自覚したの

である。

その際の親鸞の精神的過程を心理学的に分析すると、宗教的主体（アイデンティティ）の確立の過程と言うことができるが、このことは具体的には浄土真宗としての「信心」（宗教意識）、「しるし」（信仰体制）、「神祇不拝・国王不礼」（宗教的行為）が、この三部経千部読誦中止によって親鸞の人格（主体）の中で成立していたことを意味している。

親鸞は宗教的主体の確立によって、自然環境的情况に対しては受容的態度をもって、また政治的・社会的情况、具体的には権力者の横暴に対しては抵抗の姿勢をもって、自らの生き方を選択した。また、伝道教化によって他者に対してもこの様な生き方を勧めたのであり、そのことが逆に親鸞の信心（宗教意識）の深まりとして、如来との関係を成立させていたのである。

このことは、親鸞における主体性の確立としての「自信」は同時に他者においても主体性を確立させる「教人信」の行為であり、しかもそれが現代的に言えば、人間の自立と尊厳を確立する行為となっていたということである。これが今日の課題で言えば、浄土真宗における社会的実践と言うことである。

〈キーワード〉 三部経千部読誦、自信教人信、社会的実践

（龍谷大学）